

# 柏市全体で取り組んでいる読書会

高橋智子 渡辺暢恵

## 1. 柏市における読書会の広がり

千葉県柏市で、初めて読書会に取り組んだのは、2008年度である。高柳小学校6年生で『おおきな木』、中原中学校の図書委員会で『わたしのいもうと』を読んで行った。まず、学校図書館図書流通システムで全員分の本を用意し、次に、簡単に書いた各自の感想を集めた。司会は、学校図書館アドバイザーが担当し、先生（中原中学校は校長先生も同席）、学校図書館指導員も、参加者として本音を話していただき、どちらも感動的な会となった。実施後、児童生徒からは「もう一度やってみたい」という声があり、物語を読み深めるだけではなく、「友だちの感想を聞いて意外な一面がわかった。友だちのいいところがわかった」という感想が多かった。早速、学校図書館指導員のメーリングリスト、学校図書館指導員の研修会で成果を伝え、学校図書館アドバイザーが支援して、数校で実践を重ねた。

2009年度の司書教諭研修会では、『窓ぎわのトットちゃん』の一部を読んで、司書教諭数名ずつで読書会を行うことを試みた。まず、先生が自身で体験し、良さを味わうという意図で企画した。職員研修で実施した学校もあった。2009年度には、柏市教育委員会が受けた文部科学省の指定事業「学校図書館の活性化推進総合事業」の一環として、小学校1年生から6年生までの本を40冊ずつ、2セット用意し、市内の2校に寄託して借りる方式とした（57ページ参照）。その本を選定する

にあたっては、長く読書会に取り組んでいる兵庫県西宮市に問い合わせ、いただいた資料を参考にした。

2010年度の司書教諭研修会では、実践した学校に発表を依頼し、小学校は『しっばいにかんぱい!』、中学校では『キング牧師の力づよいことば』の読書会を実施した。司書教諭、学校図書館指導員、が同じテーマで研修することで協力体制ができ、さらに各校で実践を重ねて、読書会の方式を整えてきた。読書会の最後には、学校図書館指導員が事前に用意した関連する本のブックトークを加える、ということも定着してきている。読書会が次の読書への橋渡しとなっている。

小学校では、多くの学校で読書会が広まってきた。中学校では時間の設定が困難であるが、国語、図書委員会、放課後等で工夫して実施されている。「杜子春」「ならずもの(グリム)」「つみきのいえ」「葉っぱのフレディ」「おおきな木」「最後の葉」「飼育する少年(薄井ゆうじ)」「鳥(安房直子)」「残されたフィルム(内海隆一郎)」「おとなになれなかった弟たちに…(米倉斉加年)」「さとうきび畑の唄」などが行われ、いずれも好評であった。

## 2. 中学校での実践から

具体例として光ヶ丘中学校での実践を紹介する。光ヶ丘中学校は、20クラス（特別支援学級含む）の大規模校である。全校の読書活

動として「朝読」を毎朝10分間実施している。昨年度のアンケートでは1か月の読書冊数が一人平均3.4冊であった。

司書教諭研修会で他校での実践を聞き、「我が校でもぜひ」と司書教諭と学校図書館指導員で計画を立てた。とはいえ、柏市での読書会の推進の日は浅く、「読書会」を知る先生も生徒も少ないため、2010年度は、司書教諭の担当するクラスと図書委員会で実施することにした。いちばん頭を悩ませたのは選書である。今回はふだん自分では手に取らない「名作」に親しみ、考えさせることを目的としたため、読む時間、主題の明確さを考慮し、芥川龍之介の「杜子春」に決めた。読書会をするためには、同一の本がクラス人数分必要だが、学校図書館図書流通システムで40冊借りることができた。また、校内の研究授業としてほかの教諭の見学も促し、読書会の学校での浸透を狙った。

読書会として設定したのは2時間である。1時間目は、司書教諭が聞かせ読みをしながら全員で「杜子春」を読み、ワークシートに記入をさせた。柏市では、西宮市にならい、生徒全員が理解できるように朗読者の声にあわせ、文章を目で追うことを「聞かせ読み」という言い方で指導している。静寂の中、先生の読む声にあわせ、一斉に本がめくられていく瞬間は、読書会の醍醐味と言える。

2時間目では、まず「読書会」の約束を確認した。「全員が自分の意見を話す」「他人の意見を大事にすること」である。6名のグループで、ワークシートに書かせた「一番印象に残った場面」と「感想」についてまず全員が発言した。続けて司書教諭と学校図書館指導員が分担してグループを回り、杜子春、鉄冠子の人物像に関する意見を引き出した。その際、物語のどこから読み取ったのかを発言させ、文章をより読み深めるよう助言した。読書体験を共有することの喜びを多くの生徒が感じる事ができた。ただ、話し合いの人

数が多く、傍観者になりがちで活発な意見が出にくかったことが反省点であった。

図書委員会では芥川龍之介の「魔術」を扱った。3月の実施であったため、1、2年の13名で読書会を行った。授業と同じ進行だが、グループを3名にし、授業という制約もなかったためか、各々が活発に意見を述べる事ができた。生徒からの感想では、「おおまかな内容では同じ事を思っている、細かく見れば少し違うことが新鮮」「いろいろな感想が聞けて楽しかった。また、図書委員会でやりたい」など次を望む声が多く挙がり、今年度も計画している。

市内中学校での実践を集めたところ、次のような留意点が得られた。読書会を行う際、読書力の異なる生徒たちを考え、読みやすさという観点から本を選びがちであるが、おもしろかった、楽しかっただけでは、生徒たちの心をかき立たせる、答えのないテーマを持つ本がふさわしい。また、短期間に読ませ、時間をあけずに読書会を行うことが大切である。冬休みの課題として読ませて読書会をしたところ、内容が曖昧になり、感動が薄れてしまったため、生徒が発言できず話し合いが深まらなかった。司会者が慣れてくると話し合いがよくできるということもわかってきた。

### 3. 今後に向けて

柏市の読書会は、まだ全校での実施には及ばず、試行錯誤を重ね進行中である。しかし、実施した多くの学校で継続して行われているのは、ときには、先生が涙するほどの発言が全員に響き、その感動が児童生徒の心をとらえているからである。一人で読む読書とはひと味違う、話し合いによって感動をわかちあい、読みを深める読書会を今後も司書教諭、学校図書館指導員の協力で広めていきたい。

(たかはし・ともこ＝柏市学校図書館指導員、わたなべ・のぶえ＝柏市学校図書館アドバイザー)